

# 李因篤の杜詩評語にみられる音注について

——詩律學史における意義——

長谷部 剛

## (一) 前言

(一) 「李云、…」の「李」は李因篤か李天馥か

(二) 李因篤の杜詩音注

〔A〕上平聲二十文と二十一欣(殷)について

〔B〕上平聲十三佳韻と下平聲九麻韻の通用について

(四) 杜詩の「四聲遞用」について

(五) 結語

## (二) 前言

杜甫の詩文集の注釋として、清、錢謙益『箋注』の『杜工部集』二十卷(通稱『錢注杜詩』)は極めて重要な書である。しかし、乾隆年間に清朝によって錢謙益の著作はすべて禁書とされたため、<sup>(1)</sup>『錢注杜詩』は、康熙六年(一六六七)の初刻以後、重印や翻刻が忌避されたまま清末に至ることになる。

李因篤の杜詩評語にみられる音注について(長谷部)

そして、清末の宣統年間になってようやく『錢注杜詩』の翻刻本が數種類、出現する。そのなかの一つに『諸名家評本錢牧齋註杜詩』がある。

『諸名家評本錢牧齋註杜詩』は、宣統三年(一九一三)、上海の時中書局が『錢注杜詩』を翻刻したもの。本書は、その書名が示すとおり、書眉に、明の遺民や清初の名家、あわせて十八人の杜詩評が掲載されている。その書眉では、「吳云、…」・「李云、…」と、諸家の姓が記されるのみであるが、編者の袁康は巻首に「考定輯評諸家姓字」と題し、採録した諸名家の姓名を明示している。そこには、張自烈・張爾岐・俞汝爲・韓子遽・申涵光・盧世淮・陳廷敬・王士禛・王士禛・朱彝尊・查慎行・潘耒・盧元昌・宋犖・邵子湘・黃生などの名が列擧されるが、採録した杜詩評のうち、半數以上を占め

るのが、「吳云、…」「李云、…」として引用されるものであり、この「吳云、…」については、袁康は吳農祥としてゐるものの、「李云、…」については、「李」疑爲天生先生因篤、或容齋先生天馥」と、李因篤（字は天生）なのか、李天馥（容齋と號す）なのか、斷定を避けている。袁康は「考定輯評諸家姓字」の最後に、「案、以上諸家原書均未采列、餘於別本拊入」と述べているから、おそらく、袁康の據ったところの「別本」ですでに「李云、…」となっていたのであろう。それで袁康は「李」の特定を避けたと考えられる。

『諸名家評本錢牧齋註杜詩』（以下『諸名家評本』と略記）は、清末に翻刻された數種類の『錢注杜詩』のなかで、版本としての良<sup>②</sup>さもあつてか、廣く讀まれたようである。たとえば、現代中國で高等學校（大學またはそれと同等の學校をいう）文科の統一教材に指定されている、王力『主編』『古代漢語』では、唐詩の平仄を解説した箇所<sup>③</sup>に次のようにある。

杜甫「寄贈王十將軍承俊」前六句、「將軍膽氣雄、臂懸兩角弓。纏結青驄馬、出入錦城中。時危未授鉞、勢屈難爲功」。錢謙益引李（因篤？）云、「臂」字宜平而仄、應於第三字還之、且無粘聯、拗體也。集中只此一首、人

藉口不得。<sup>③</sup>

『臂』字宜平而仄：人藉口不得」は、『諸名家評本』卷十一「寄贈王十將軍承俊」の書眉にある「李云、…」の一條を引用したものである。李のことばの大意は以下のようなになる。——杜甫の五言律詩「寄贈王十將軍承俊」の第二句「臂懸兩角弓<sup>平仄平</sup>」では、第一字「臂」が平聲でなければならぬのに仄聲となっている。（第一字が仄聲であるならば）第三字を平聲にしなければならぬ（しかし、第三字「兩」は仄聲である<sup>④</sup>）。また、この詩は粘法が守られておらず、拗體である。（このような拗體の詩は）杜甫の詩集にはこの一首しか無く、詩を作る者はこの一首を口實にして（このような拗體の詩を作つて）はいけない。——

ただ、『古代漢語』が「錢謙益引李（因篤？）云」というのは誤りである。「李云、…」の一條を『諸名家評本』の書眉に掲載したのは、前述の通り、清初の錢謙益ではなく、清末の袁康である。そもそも、李因篤は錢謙益より後の人であるから、錢謙益が自分の杜詩注に李因篤のことばを引用するとは考えられないのである。

『古代漢語』で「李（因篤？）」と疑問符を附しているの

は、『諸名家評本』の「考定輯評諸家姓字」に従い、特定を避けているのであろう。

本稿では、まず、『諸名家評本』の「李云、…」が李因篤（字は天生）なのか、李天馥（容齋と號す）なのか、その特定を試みたい。そしてさらに、この「李云、…」の内容を具體的に検討し、——「李云、…」のいくつか、杜甫の詩律を論じているという点において——詩律學史上の意義を明らかにしたい。

## （二）「李云、…」の「李」は李因篤か

### 李天馥か

まず結論から言えば、『諸名家評本』の「李云、…」の「李」は李因篤と特定して間違いないであろう。なぜならば、『諸名家評本』の「李云、…」は、清、劉濬『輯』『杜詩集評』に引用される「李云、…」の評語とほぼ一致し、『杜詩集評』では、「李云、…」の「李」は李因篤と特定されているからである。劉濬の『杜詩集評』十五卷は、王士祿・王士禎・錢燦・朱彝尊・李因篤・潘耒・查慎行・何焯・宋犛・陸嘉淑・申涵光・俞琰・吳農祥・許昂霄・許燦らの杜詩評を集

李因篤の杜詩評語にみられる音注について（長谷部）

めたもので、嘉慶九年（一八〇四）の刊。編者、劉濬の自序には以下のようにある。

國初名輩若王氏士祿・士正・朱氏彝尊・李氏因篤・吳氏農祥・查氏慎行、以能詩名一世、諸先生皆有杜詩評本、當時不授梓、流傳者少。嘉興許晦堂（許燦）先生淹博好學、酷愛藏書、乃鉤求而盡得之。餘於許氏爲葭莩親、因得借歸錄而藏之。

この自序から、王士祿・王士禎・李因篤・朱彝尊・吳農祥・查慎行ら清初の諸家の杜詩評は、刊刻されることなく流傳されることが少なかったことがわかる。

『杜詩集評』は李因篤の名を明記し、それよりほぼ百年後の『諸名家評本』では「李云、…」の特定を避けている。また、兩者の間には、「李云、…」として引用される評語にも若干の異同がある。したがって、『杜詩集評』と『諸名家評本』はそれぞれ據ったテキストが異なっていたのであろう。

以下、李因篤がいかなる人物なのか、略述したい。

李因篤（明、崇禎四年（一六三一）〜清、康熙三十一年（一六

九二）、字は天生（または孔德・子德）、中南山人と號した。陝西富平の人。明の諸生。明朝滅亡後の一時期、代州知州であった陳上年（字は祺公）の幕下にあり、傅山・顧炎武・屈大均らと交を結ぶ。とりわけ、康熙二年（一六六三）に顧炎武と出會ったことは彼の人生において決定的な出来事であった。この邂逅以降、李因篤は顧炎武と音韻についての討論を重ねる。康熙六年、李因篤は顧炎武とともに、陳上年を刊行者として『廣韻』を重刻する。そして、この『廣韻』原本を所有していたのは李因篤なのである。（當時通行していた）百六韻の「平水韻」ではなく、二百六韻の『廣韻』によって、『今音（中古音）』を究明すべく、李は顧とともに、『廣韻』の重刻に盡力したのであった。また、顧炎武『音學五書』<sup>9</sup>の編集に深く関わった。特に、同書のなかの『音論』三巻には李因篤の名が頻見する。

康熙七年（一六六八）、顧炎武が黃培の筆禍事件に連座し濟南の獄に下された時、李因篤はその釋放のために奔走し京師にまで至っている。康熙十七年（一六七八）、李因篤は、内閣學士、李天馥らによって博學鴻儒科に推され、母の老病や家貧を理由に辭退するものの、ついにはそれに應じ、翌年、翰林院檢討を授けられ『明史』編修を命ぜられる。このことに

ついて顧炎武は李因篤を激しく非難した。<sup>10</sup>李は月を逾えずして母の老病を理由に三度上疏して歸郷を請い、康熙帝自らこれを許した。晩年は關中書院・朝陽書院などで學を講じた。彼の詩は杜詩を宗とし、詩集に『受祺堂詩集』三十五巻がある。著作としてはほかに『受祺堂文集』四巻・續刻四巻・『古今韻攷』四巻・『儀小經』一巻・『漢詩音注』五巻などがあり、なかでも（後出する）『古今韻攷』四巻は、顧炎武『音學五書』の内容を略述し、さらにその缺を補うものである。

このように、李因篤は顧炎武とともに音韻學の研鑽に勉めた人物である。そして、注目すべきことは、『諸名家評本』の「李云、……」の評語のなかに、杜詩の詩律の運用や押韻の實態について言及するものが散見し、しかも、それらは李因篤の音韻に關する學說と、或るものは一致し、或るものは密接な關連を持っている、ということである。このこともまた、『諸名家評本』の「李云、……」を李因篤と特定する根據となるのであり、詳しくは次節（三）で述べることとする。

### （三）李因篤の杜詩音注

前に述べたように、『諸名家評本』に見られる「李云、……」  
 「吳云、……」は全體の半數以上を占めているから、「李云、……」、すなわち、李因篤の評語は膨大な量にのぼる。そして、李の杜詩評を通覽してわかるのは、その大部分が、體裁・内容の両面から見ても、（南末末の劉辰翁を嚆矢とする）<sup>(1)</sup> 傳統的な「評點（評語と批點）」の範疇を出ることがない、ということである。

しかし、李の杜詩評のなかにも注目すべきものがある。杜甫の五言古詩「最末陽、以僕阻水、書致酒肉、療飢荒江、詩得代懷、興盡本韻。至縣、呈最令。陸路去方田驛四十里、舟行一日、時屬江漲泊於千方田」について、李は次のように言う。

李云、「興盡本韻」者、蓋篇中所押之字皆『廣韻』三十小部。唐制二十九篠・三十小通用。而此首專用小韻不及篠韻、故云然。由是推之、可知劉平水併省之誤。<sup>(2)</sup>（以下略）……

杜甫「最末陽、以僕阻水……」の押韻について李の見解が述べられている。その大意は次のようになる。——詩題中の

李因篤の杜詩評語にみられる音注について（長谷部）

「興盡本韻」とは、詩興が、「本韻」、すなわち『廣韻』上聲三十小の範圍内だけの押韻で盡くされた、という意。唐代、官によって制定された韻（官韻）では、上聲二十九篠と三十小とは同用（通用）した。<sup>(3)</sup> しかし、この詩では、「吵・紹・表・小・漾・旄・悄・矯・醪・趙・擾・少・沼」と、三十小だけで押韻していて、二十九篠には及んでいない。このことから、平水の劉淵が二十九篠と三十小を合併して十七篠としたこと（『平水韻』の分韻）は誤りであることがわかる。

李因篤のころ、世では百六韻の「平水韻」が沈約『四聲譜』以來の傳統的な韻と考えられていた。李因篤は自ら得たところの『廣韻』<sup>(4)</sup>を顧炎武とともに覆刻し、『廣韻』こそが「今音（中古音）」を代表する書であることを示した。右に挙げた、「諸名家評本」の「李云、……」の一條は、内容的に『廣韻』覆刻と密接に關係していて、清初の音韻學史における李因篤の業績を想像させるに足るものとなっている。

#### 「A」上平聲二十文と二十一欣（殷）について

『諸名家評本』の李の評語には、さらに、次のようなものがある。

・杜甫「奉贈鮮于京兆二十韻」(『諸名家評本』卷九)

李云、「斤」字在殷韻。韻窄。唐人多通眞、非出也。

・杜甫「贈王二十四侍御契四十韻」(『諸名家評本』卷十三)

李云、……「筋」字・「勤」字、俱在殷韻。此並與眞・

諄・臻韻合。知殷韻唐人以其部窄、多與眞通。不與文通也。

これもまた、杜詩の押韻の實態から、『廣韻』における同用獨用の規定が正しいかどうかを検討したものである。

「奉贈鮮于京兆二十韻」では「斤」が、「贈王二十四侍御契四十韻」では「筋」「勤」が、韻字として用いられている。<sup>(17)</sup>

「斤」「筋」「勤」は『廣韻』上平聲二十一欣(殷)に屬するが、二十一欣(殷)に屬する字は少ない(韻窄)。そのため、唐人は多く十七眞と通用(同用)する。十七眞は十八諄・十九臻と同用するから、「奉贈鮮于京兆二十韻」と「贈王二十四侍御契四十韻」ではともに、押韻字として、十七眞・十八諄・十九臻・二十一欣(殷)が用いられている。つまり、二十一欣(殷)が用いられていても、これは出韻には

ならない。そしてまた、二十一欣(殷)は『廣韻』の目錄では二十文と同用となっているが、二十文とは通用(同用)しない。——以上が李の見解である。

この見解は、以下に引く顧炎武『音論』のそれと全く一致する。

按唐時二十一殷雖云獨用、而字少韻窄、無獨用成篇者、往往於眞韻中、閒一用之。如杜甫「崔氏東山艸堂」詩用「芹」字、獨孤及「送韋明府」「答李滁州」二詩用「勤」字、是也。然絕無通文者。而二十文獨用、則又絕無通殷者。合爲一韻、始自景祐。去聲問敝亦然。惟上聲吻隱、『廣韻』目錄註有「同用」字、說見下條。<sup>(18)</sup>

顧炎武は、唐代には二十一欣(殷)が十七眞と多く通用することを、杜甫「崔氏東山草堂」(『諸名家評本』卷九)や獨孤及の詩で例證し、續けて、唐代では二十文が獨用したことを主張する。さらに、顧炎武は、(上平聲二十文に相配する)去聲二十三問と(上平聲二十一欣(殷)に相配する)去聲二十四敝もまた同じだと言う。

『諸名家評本』において、李は、二十一欣(殷)・十七眞通

用の例として、「奉贈鮮于京兆二十韻」「贈王二十四侍御契四十韻」を挙げているから、李の指摘は、まさしく顧炎武の考證を補うものとなっている。

「惟上聲吻隱、『廣韻』目錄註有『同用』字、說見下條」については、『音論』に以下のようにある。

今本目錄十八吻下註云、「隱同用」、其卷中十八吻十九隱、又各自爲部、不相連屬、而其下各註云「獨用」。友人富平李子德因篤以爲目錄誤。……（以下略）……

李や顧の發掘した『廣韻』（『今本』）の目錄では、上聲十八吻・十九隱が同用となっている。しかし、（上平聲二十文と、上平聲二十一欣〈殷〉が同用しないように）、（上平聲二十文に相配する）上聲十八吻と、（上平聲二十一欣〈殷〉に相配する）十九隱もまた、同用することはない。これについて、李因篤は『廣韻』の目錄が誤っている、と指摘したのである。

顧炎武と李因篤は、『廣韻』重刻の際に、『廣韻』目錄に注記された同用獨用の規定が唐代の規定を實際に傳えているかどうか、議論を重ねたのであろう。<sup>(21)</sup>そして、その痕跡は、顧炎武『音論』だけでなく、『諸名家評本』の李のことも

李因篤の杜詩評語にみられる音注について（長谷部）

見ることが出来る。特に、顧炎武の「二十文獨用」説は、戴震の「攷定『廣韻』獨用同用四聲表」<sup>(22)</sup>にも採り入れられた、大變有名なものである。<sup>(23)</sup>しかし、『諸名家評本』の李のことも、それに關連する見解が認められる以上、「二十文獨用」説を、顧炎武ひとりの功績に歸するのではなく、やはり、李因篤との議論を通じて生まれたものと考えるべきではなからうか。

〔B〕上平聲十三佳韻と下平聲九麻韻の通用について

次に取り上げるのは、杜詩における佳韻と麻韻の通用（通押）である。

・杜甫「喜晴」〔諸名家評本〕卷二

李云、「佳」字不與麻韻通。公此詩及「泛舟登瀛西」之作、用「佳」「崖」「柴」「涯」字皆出韻。

・杜甫「柴門」〔諸名家評本〕卷六

李云、按『廣韻』九麻中亦無「涯」字而唐人近體多用之。

杜甫の五言古詩「喜晴」は、第二句末を「佳」、第八句末を「涯」で押韻する。同じく五言古詩「柴門」は、第二句末を「崖」、第四句末を「柴」、第二十句末を「佳」、第二十二句末を「涯」で押韻する。「佳・涯・崖・柴・涯」は上平聲十三佳に屬するから、兩詩とも上平聲十三佳が下平聲九麻に混じって押韻されていることになる。<sup>24</sup>

李は「喜晴」において、「佳」は下平聲九麻と通用しない、この「喜晴」詩と、「泛舟登瀛西」に始まる「柴門」詩は、「佳」以外にも、（上平聲十三佳に屬する）「崖」「柴」「涯」が用いられており、これは出韻である、と言う。その一方で、李は「柴門」においては、唐人は近體詩で上平聲十三佳と下平聲九麻を多く通用させている、と述べる。このように、一方では、佳韻と麻韻は通用しない、と言い、もう一方では、佳韻と麻韻は通用する、と言っているのだから、李の見解は矛盾していると言わざるを得ない。

李が「唐人近體多用之」と述べる通り、上平聲十三佳と下平聲九麻とが通用する例は、杜甫やその他の唐宋詩人の近體詩においても見いだすことができる。<sup>25</sup>しかし、「喜晴」と「柴門」における矛盾した見解に象徴されるように、この現

象について、李は合理的な解釋を提出することはできなかったようだ。李因篤の『古今音攷』<sup>26</sup>卷三「集唐人古詩通用韻」には、「平聲・五歌六麻爲一部」の條に雙行注として、「杜『喜晴』用『佳』字。『柴門』二十一韻麻韻用『柴』『佳』二字又『崖』字」とある。「五歌六麻爲一部」の下に麻韻と佳韻との通用の例を擧げているのだから、『古今音攷』では、この現象を例外として處理していることがわかる。

杜詩における佳韻と麻韻の通用は、韻書の規定に拘わらずに、杜甫自身（七一二〜七七〇）の實際の發音に據った結果ではないか、という可能性を想定し得る。慧琳の『一切經音義』（七八四〜八〇七撰述）は、撰述當時の都長安の字音（いわゆる秦音）を表す貴重な材料であるが、その反切を調査した結果、當時の長安音では佳韻と麻韻が合流していたと推測されている。<sup>27</sup>もちろん、杜甫自身の實際の發音と、慧琳『一切經音義』にみられる秦音は全く同じものではないであろうから、以上述べた見解は一つの可能性を示したにすぎない。また、上平聲十三佳に屬するすべての字が下平聲九麻と通用するわけではなく、「佳」「崖」「柴」「涯」などの字に限られていることも問題を複雑にしている。<sup>28</sup>

もちろん、清朝初期の段階で李因篤にとってそのようなこ



とは知りようもないことである。前述の『諸名家評本』における矛盾した見解は、上平聲十三佳韻と下平聲九麻韻の通用について、李が解釋に苦しんだことの現れであると考えられはしないだろうか。ともあれ、管見のかぎりでは、李因篤こそ最も早い時期に佳韻と麻韻の通用という現象について言及した人物であると考えられる。

以上、例を舉げて説明したように、『諸名家評本』の「李云、……」のなかには、杜詩の押韻の實態に言及した資料が僅かながら存在し、しかも、それが顧炎武『音論』や李因篤『古今韻攷』と、内容上、密接なかかわりを持っていることがわかる。この事實は、『諸名家評本』の「李云、……」が李因篤の評語であると特定するに足る根據となるであろう。

そして、『諸名家評本』の「李云、……」には、このような、押韻の實態に言及したもの以外にも、詩律の運用を解説したものや、音注を施したものが、——その總數は少なく内容は體系ではないが——存在する。李因篤は、漢代の詩歌に音注・評語を加えた、『漢詩音註』<sup>(29)</sup>なる書をのこしている。この點からいえば、『諸名家評本』の「李云、……」に見られる、杜詩の詩律の運用や押韻の實態について言及した資料は、ま

李因篤の杜詩評語にみられる音注について（長谷部）

さしく李因篤の「杜詩音注」と名付けることができる。

#### (四) 杜詩の「四聲遞用」について

清初の朱彝尊の書簡「寄查德尹編修書」に、以下のようにある。

蒙竊聞諸昔者吾友富平李天生之論矣。少陵自詡晚節漸於詩律細、曷言乎細。凡五七言近體、唐賢落韻共一紐者不連用、夫人而然。至於一三五七句用仄字、上去入三聲、少陵必隔別用之、莫有疊出者、他人不爾也。<sup>(31)</sup>

朱彝尊はここで、李天生、すなわち李因篤のことを引いている。——杜甫は「晚節漸於詩律細」<sup>(32)</sup>と自ら誇ったが、何について「細」と言っているのであろうか。およそ、五七言の近體詩では、唐の優れた詩人は非押韻句に同じ聲母を續けて用いることはないし、多くの人もそうである。しかし、（平聲で押韻するとき）第一・三・五・七句の句末（＝非押韻字）に仄聲（上去入）を用いることに關しては、杜甫は上聲・去聲・入聲の同一聲調を必ず隔て用い、同一聲調が續けて現れることがない。（このような詩律の細やかな運用は、杜甫

だけができることであって、)他の者はそうではない。——李のことばの大意はこのようになる。

朱彝尊は、李のことばを引用した後、杜甫の七言律詩のなかで、ただ八首のみ李因篤のことばと合わない例を挙げる。<sup>34)</sup>

しかし、朱は續けて、「他のテクストには文字の異同があり、それに従えば、李因篤のことばと合うことになる」旨を述べ、文末では「天生之獨見、善不可沒也」と、李因篤の發見を高く評價している。

李の發見は、後世に「四聲遞用」<sup>35)</sup>と呼ばれるものに相當する。仇兆鰲「注」『杜詩詳注』にも以下のようにある。

李天生曰、少陵七律百六十首、惟四首疊用仄字、如「江村」詩、連用「局」「物」二字、考他本「多病所須惟藥物」作「幸有故人分祿米」、於「局」字不疊矣。「江上值水」詩、連用「興」「釣」二字。考黃鶴本、「老去詩篇渾漫興」作「老去詩篇渾漫興」、於「釣」字不疊矣。「秋興」詩連用「月」「黑」字、考黃鶴本、「織女機絲虛夜月」作「織女機絲虛月夜」、於「黑」字不疊矣。可見「晚節漸於詩律細」。凡上尾、仄聲原不相犯也。<sup>36)</sup>

李因篤は、杜甫の七言律詩百六十首（實際は百五十一首）のうち、ただ四首のみに仄聲の同一聲調が續けて用いられている、と言い、その四首を挙げる。そして、この四首も他のテクストに據れば、同一聲調の重出にはならないことを指摘している。

これは、前に掲げた朱彝尊の調査結果である八首と一致しない。ともあれ、簡明勇『杜甫七律研究與箋注』<sup>37)</sup>に據れば、杜甫の七律百五十一首のうち、四聲遞用が行われているものは五十六首、約三分の一に過ぎず、のこり九十五首では仄聲の同一聲調が續けて現れている。したがって、李因篤の言うような「莫有疊出者」では決してないのである。五言の近體詩においても實態は同じである。

しかしながら、約三分の一の七律で四聲遞用が行われているという事實は、決して偶然的の所産ではあるまい。やはり、杜甫が意識的にそれを運用した、と考えられるのである。また、杜甫の絶筆と考えられている五言排律「風疾舟中伏枕書懷三十六韻、奉呈湖南親友」<sup>38)</sup>では、三十六韻という長篇であるにもかかわらず、非押韻字に仄聲の同一聲調が續けて現れることはない。<sup>39)</sup>これなどは、四聲遞用のもっとも完成された作品と見なすことができる。

ところで、非押韻字に仄聲の同一聲調が續けて現れることを、前に掲げた仇兆鰲『杜詩詳注』所引の李因篤の發言では「上尾」と言っているが、これは本來は「鶴膝」と呼ぶべきである。六朝期の聲律論において、「鶴膝」の病とは、五言詩で第五字と第十五字とが同一聲調であることである。<sup>④</sup>ちなみに「上尾」の病とは、五言詩で第五字（非押韻字）と第十字（押韻字）とが同一聲調であること。

杜甫の時代、すなわち、盛唐期には、平仄律からなる近體詩の韻律形式はすでに完成した状態にあった。<sup>④</sup>しかし、李因篤の指摘するように、杜詩において、ある程度、「鶴膝」（李因篤の「上尾」）が忌避されていることは、平上去入の四聲からなる、六朝新體詩的韻律意識が、部分的に残存していたこととの現れであると考えられる。この點で、李による杜詩の四聲遞用の發見は、詩律學史上、極めて大きな意義を持っているよう。

ところが、『諸名家評本』の「李云、…」には、この四聲遞用についての言及があまり見られず、今回、わずか一條のみ搜し得た。

・杜甫「見王監兵馬使說、近山有白黑二鷹、羅者久取、竟未

李因篤の杜詩評語にみられる音注について（長谷部）

能得。王以爲毛骨有異他鷹、恐臘後春生驚飛避暖、勁翮思秋之甚、眇不可見。請余賦詩」其二（『諸名家評本』卷十二）

李云、正入與上作變換。

この七言律詩では、第一・三・五・七句の句末（「非押韻字」が「有（上聲）・塞（入聲）・巧（上聲）・日（入聲）」となっており、上聲と入聲が交互に現れている。「正入與上作變換」とはこのことを言っているのであろう。本詩はまさしく四聲遞用の詩であり、「鶴膝」（李因篤の「上尾」）の病を避けている。

前節（三）で述べたとおり、李因篤は、顧炎武とともに『廣韻』における同用獨用の規定が果たして唐代の規定をそのまま傳えているかどうか、検討を加えた人物である。そのために、彼は杜詩の押韻の實態を詳細に調査した。そして、その調査結果の痕跡が、『諸名家評本』の「李云、…」に残存しているのであった。

ここで想像されるのは、李因篤が杜詩の四聲遞用を發見したのは、杜詩の押韻の實態を詳細に調査した、その副次的な産物ではないか、ということである。李は杜詩の押韻を逐一

調査するなかで、非押韻字にもまた、ある一定の規則があることに気付いた。それが「四聲遞用」だったのであろう。

『諸名家評本』の「李云、…」で、杜詩の「四聲遞用」とかわるものは、今回捜査したかぎりでは、前掲した「李云、正入與上作變換」のわずか一條のみである。しかしながら、『諸名家評本』以外の資料——朱彝尊「寄查德尹編修書」など——に見られる、李因篤の「杜詩四聲遞用」説との関連から考えると、この一條もまた大きな意義も持っているかと断される。

## (五) 結語

『諸名家評本』の「李云、…」の「李」が李因篤であることは間違いないまい。李因篤の音韻學上の業績、すなわち、①『廣韻』の發見と覆刻、②顧炎武『音學五書』編集への協力、③專著『古今韻攷』——この三點と密接に關連する内容が、『諸名家評本』の「李云、…」のなかに含まれているからである。

李因篤は顧炎武とともに、『廣韻』を中心に据えて「今音（中古音）」のありさまを明らかにしようとした。<sup>(43)</sup> その作業の一つとして、李・顧の二人は、杜詩を資料として多く活用し

つつ、『廣韻』目録にある同用獨用の規定について検討を加えた。その功績は専ら顧炎武ひとりに歸せられることがほとんどである。しかし、この作業の痕跡が、『諸名家評本』の「李云、…」に、杜詩の詩律の運用や押韻の實態についての發言として殘存する以上、この李因篤の杜詩評語にみられる音注もまた、輕視されるべきものではない。

今回は主として、李因篤の杜詩音注が詩律學史において有する意義について論じた。しかし、李因篤にとって、杜詩が單なる音韻學上の資料でしかなかった、というわけではない。『諸名家評本』に見られる、李因篤が杜詩に加えた評語は、膨大な量にのぼり、音注部分はその中のごく一部にすぎないのである。李因篤の評語を通覽すると、そこには李の杜詩への酷愛が如實に看取される。その内容の具體的な検討については、今後に機會を譲りたい。

## [注]

- (1) 『清史列傳』卷七十九「貳臣傳乙」錢謙益。および、姚鼐編輯『清代禁燬書目四種』應繳違礙書籍各種名目（王雲五主編 萬有文庫第二集七、商務印書館、一九三七）。
- (2) 周采泉『杜集書錄』上冊一五一頁（上海古籍出版社、一九

八六)。

(3) 王力『主編』『古代漢語(修訂本)』第四册一五二頁の段下注(中華書局、一九八二)。なお、『諸名家評本』では、『應於第三字還之』の後に「此未還」の三字がある。

(4) したがって、第二句は「孤平」を犯していることになる。

(5) 錢謙益(一五八二—一六六四)。李因篤(一六三一—一六九二)。

(6) 『杜詩叢刊』第四輯所收。

(7) 李因篤の傳記については、『清代人物傳稿』上編第五卷「李因篤」(趙侃「執筆」、中華書局、一九八八)を多く参考にした。

(8) 顧炎武・李因篤らが康熙六年に重刻した『廣韻』には、陳上年の序があり、そこには以下のようにある。

吳郡顧徵君炎武……又出其所攜善本、相與繙閱、惜此書存者無幾、即顧本得借留、同學關中李處士因篤偶見之京師舊肆、遂購以歸之、乃割奉若干、屬淮上張文學昭重付剞劂、公諸海內焉。

また、吳懷清「編」『關中三李年譜・天生先生年譜』(『關中叢書』所收、いま『叢書集成續編』第二五六册所收)には、康熙六年の條に、

是年六月陳祺公重刻先生所得『廣韻』於淮上。

とあり、さらに雙行注として、

『山志』(王弘「撰」、李子德嘗得『廣韻』舊本、顧亭林

李因篤の杜詩評語にみられる音注について(長谷部)

言之陳祺公、託張力臣淮陰、此唐人所用之韻也。とある。

この重刻本『廣韻』は、梓に付した書肆の名(符山堂)から「符山堂本」と呼ばれる(今回、稿をなすに当たり、早稻田大學中央圖書館所蔵の符山堂本を披見し得た)。符山堂本には卷首に正字として、「上谷陳上年祺公・吳郡顧炎武寧人・關中李因篤天生・淮陰張昭力臣」の名が列擧される。

なお、李因篤の得たところの『廣韻』舊本」とは、明の内庫の板刻(いわゆる「明内府本」)であることが、澤存堂本『廣韻』の朱彝尊の序から知られる。「明内府本」と「符山堂本」の關係については、朴現圭・朴貞玉『廣韻版本考』(學海出版社、一九八六)を参照。

(9) 『音韻學叢書』四九所收。なお、このなかの『音論』には譯注がある。「清代經學の研究」班「顧炎武『音論』譯注」(『東方學報(京都)』第五十一册、一九七九)。

(10) 顧炎武の書簡集『蔣山傭殘稿』卷二「答李子德(接讀來詩……)參照。いま、華忱之「點校」『顧亭林詩文集』(中華書局、一九八三)に據る。

(11) 元、大德七年(一三〇三)に刊刻された『集千家注批點杜工部詩集』二十卷は、南宋の劉辰翁(字は會孟)が杜詩に評點(評語と批點)を加えたものを、元の高崇蘭(字は楚芳)が編集した、もっとも早い時期の評點本。この評點本は元から明にかけて多くの翻刻が生まれ、非常に流行した。いま、

## 中國詩文論叢 第十八集

『杜詩叢刊』第一輯が明代の翻刻本を収める。

(12) 『諸名家評本』卷八。

(13) 『音論』卷上「唐宋韻譜異同・『廣韻』」に「而小字注云『獨用』『同用』、則唐人之巧令也。」とあり、さらに雙行注として「唐人謂之官韻、李肇『國史補』、宋濟老於文場、嘗試賦、誤失官韻」とある。

(14) 南宋の淳祐年間（一二四一～一二五二）、劉淵なる人物が平水（現在の山西省平陽縣）で作ったのが百七韻の「平水韻」とされる。李因篤のころはそう信じられていたようだが、のちに、錢大昕の考證により、「百七韻を平水の劉淵がつくった」という事實は疑問視されている（錢大昕『潛研堂文集』卷二十七「跋平水新刊韻略」および、『十賀齋叢新錄』卷五「平水韻」）。

のちに、百七韻は上聲二十五拯が二十四廻に合流し百六韻となった。

(15) [注] (8) 参照。

(16) 『音論』卷上「韻書之始」に「則知書之見存於今者、惟『廣韻』最古、今取以爲據云」とある。

(17) 「奉贈鮮于京兆二十韻」：人（眞）・倫（諄）・臣（眞）・塵（眞）・身（眞）・淪（諄）・斤（欣）・殷（眞）・親（眞）・新（眞）・巡（諄）・陳（眞）・賓（眞）・詵（臻）・筠（諄）・宸（眞）・伸（眞）・鈞（諄）・辛（眞）・辰（眞）・津（眞）。  
「贈王二十四侍御契四十韻」：身（眞）・塵（眞）・春

（諄）・巾（眞）・淪（諄）・鵠（諄）・頻（眞）・神（眞）・辛（眞）・秦（眞）・綸（諄）・親（眞）・臣（眞）・馴（諄）・新（眞）・眞（眞）・貧（眞）・筠（諄）・辰（眞）・勻（諄）・銀（眞）・蘋（眞）・人（眞）・旬（諄）・鄰（眞）・賓（眞）・珍（眞）・闌（眞）・唇（諄）・榛（臻）・濱（眞）・筋（欣）・殷（眞）・尊（諄）・輪（諄）・勤（欣）・晨（眞）・淳（諄）・麟（眞）・伸（眞）・陳（眞）。

(18) 殷韻は、宋代、宣祖（太祖の父）の諱「弘殷」を避けて欣韻とされた。

(19) 『音論』卷上「唐宋韻譜異同・『禮部韻略』」の「『廣韻』上平聲二十文獨用、二十一殷獨用、今二十文與欣通」雙行注。

(20) 『音論』卷上「唐宋韻譜異同・『禮部韻略』」の「『廣韻』上聲十八吻獨用、十九隱獨用」雙行注。

(21) 符山堂本『廣韻』卷三「上聲」の目録には、欄外に「李因篤曰、十八吻・十九隱、又各自爲部、不相連屬、而其下各註云『獨用』。此目錄乃云『同用』、誤」とある。

(22) 『聲韻攷』卷二「『音韻學叢書』十二」所收。

(23) 馬宗霍『音韻學通論』卷四「唐入用韻考」（商務印書館、一九三二）では、戴叔倫「江干」（『全唐詩』卷二七三所收）が、「紛（文）・雲（文）・勤（欣）・殷（眞）・裙（文）」と、二十文と二十一欣（殷）が同用される例を擧げて、顧炎武の「二十文獨用」説を「顧氏失考」と否定している。

(24)

「喜晴」：佳(佳)・華(麻)・花(麻)・涯(佳)・她(麻)・除(麻)・家(麻)・麻(麻)・瓜(麻)・瑕(麻)・沙(麻)・斜(麻)・查(麻)・嗟(麻)。

「柴門」：崖(佳)・柴(佳)・呀(麻)・家(麻)・鄒(麻)・車(麻)・查(麻)・斜(麻)・她(麻)・麻(麻)・沙(麻)・奢(麻)・花(麻)・嗟(麻)・佳(佳)・涯(佳)・遮(麻)・華(麻)・誇(麻)・差(麻)・霞(麻)。

(25)

上平聲十三佳と下平聲九麻が通用する例として、杜甫の近體詩では、「杜位宅守歲」(五言律詩、『諸名家評本』卷九)、「江畔獨步尋花七絕句」其三(七言絕句、同書卷十二)、「春歸」(五言排律、同書卷十三)、「暮春題漢西新賃草屋五首」其四(五言律詩、同書卷十四)などがある(向島成美「杜甫詩の用韻について」『國文學漢文學論叢』十九、東京教育大學文學部、一九七四)による。

また、王力『漢語詩律學(增訂本)』(上海教育出版社、一九八八)六七頁では、歐陽脩「三日赴宴口占」、劉禹錫「送荊州李郎中赴任」などの例を挙げる。

(26)

『音韻學叢書』十所收。

(27)

張世祿「杜甫與詩韻」(『張世祿語言學論文集』、學林出版社、一九八四(初出一九六二))は、黃淬伯「慧琳一切經音義反切考」(中央研究院歷史語言研究所專刊之六、一九三二)に據ってこのことを述べる。

(28)

「注」(25)所掲の『漢語詩律學』は、佳韻と麻韻の通押に李因篤の杜詩評語にみられる音注について(長谷部)

ついて、「但除『佳』字外、佳韻其他的字未見有與麻通押者。由此看來、也許『佳』字本是分屬兩韻、麻與佳是否應認為鄰韻、頗成問題」と述べる。

『漢語詩律學』は「但除『佳』字外、佳韻其他的字未見有與麻通押者」と述べるが、本稿で指摘したように、「佳」字以外にも「崖」「柴」「涯」などの字も麻韻と通押する。

(29)

①詩律の運用を解説したもの。

・杜甫「寄贈王十將軍承俊」(『諸名家評本』卷十一)↓本稿第一(一)節所掲。

・杜甫「江畔獨步尋花七絕句」其六(『諸名家評本』卷十二)李云、拗處却極自然。

②音注を施したもの。

・杜甫「大雲寺贊公房四首」其三(『諸名家評本』卷二)李云、殷、上聲。

・杜甫「九日」(『諸名家評本』卷十二)李云、……路難之難平聲。

・「初冬」(『諸名家評本』卷十三)

李云、窄字有作穿字者。穿去聲。

(30)

『叢書集成續編』第二五六冊所收。

(31)「寄查德尹編修書」(『曝書亭集』卷三十三、四部叢刊所收)。なお、「查德尹」は查嗣琛(字は德尹。查慎行の弟)。

(32)「遣悶戲呈路十九曹長」(『諸名家評本』卷十八)。

(33)

第一句が押韻する場合は、第三・五・七句末の三箇所に仄

## 中國詩文論叢 第十八集

聲字が用いられることとなる。

- (34) 『諸名家評本』卷九「鄭駙馬宅宴洞中」。卷十一「江村」。

卷十五「秋興八首」其七。卷十一「江上值水如海勢、聊短述」。卷十「題鄭縣亭子」。卷十「至日遣興、奉寄北省舊閣老兩院故人二首」其一。卷十一「卜居」。卷十二「秋盡」。

- (35) 王力『漢語詩律學』第一章第十一節「上尾」は、「清」董文煥『聲調四譜圖說』に據り、「四聲遞用」に二種類あることを述べる。一つは、①「一句のなかに平上去入の四聲がすべて備わっているもの」。もう一つは、②「平聲で押韻するとき」第一・三・五・七句の句末（非押韻字）に、上聲・去聲・入聲の同一声調を續けて用いないこと。本稿で取り上げる「四聲遞用」は、もちろん後者(②)である。

- (36) 仇兆鰲「注」『杜詩詳注』卷一「鄭駙馬宅宴洞中」。なお、

この李因篤の發言は『諸名家評本』には見られない。

- (37) 五洲出版社（臺北）、一九七三。

- (38) 蕭滌非「選注」『杜甫詩選注』（人民文學出版社、一九九二）。

- (39) 『諸名家評本』卷十七。

- (40) 毛慶「晚節漸於詩律細」詳辨——兼論後期杜詩格律之精妙」

『杜甫研究學刊』一九九三年第四期）の指摘。

- (41) 空海「撰」『文鏡秘府論』西卷「文二十八種病」参照（『弘法大師 空海全集』第五卷、興膳宏「譯注・解説」、筑摩書房、一九八六）。

- (42) 長谷部剛「杜甫詩律小考（上）」——杜甫前半期の五言律詩

を中心に（『中國詩文論叢』第十七集、一九九八）参照。

- (43) さらに顧炎武は「今音（中古音）」を基礎に置いて「古音（上古音）」の研究へ向かったのである。說文會「編」・賴惟勤「監修」『說文入門』（大修館書店、一九八三）二二三—二四八頁参照。

本稿は、一九九九年早稲田大學特定課題研究助成費による研究成果の一部である。